メコン川下流域におけるプレアンコール期の 都城の立地環境に関する地理学的研究

久保純子* 南雲直子**

Geographical Settings of Pre-Angkorean Cities in the Lower Mekong Basin

Sumiko KUBO* and Naoko NAGUMO**

Abstract

We analyzed the locations of pre-Angkorean (2-8th century) and early Angkorean (9th century) cities in Cambodia and Laos by interpreting aerial photographs and carrying out a field investigation. We studied Angkor Borei (southern Cambodia), *Shresthapura* near the Vat Phou temple (southern Laos), Sambor Prei Kuk (central Cambodia), Banteay Prei Nokor (southeastern Cambodia), Phnom Chissor (southern Cambodia) and *Hariharalaya* (in Roluos near Angkor in Cambodia). We produced geomorphological maps of each city, and analyzed geographical settings focusing on relationships between cities and water resources, locations of temples, residential, and paddy production areas. The results will be published in another paper, we have already submitted as an original article.

Key words : micro-landforms, ancient city, temple, Cambodia, Laos

キーワード : 微地形, 都城, 寺院, カンボジア, ラオス

I. 研究の目的と意義

著者らは地理学の分野から、カンボジアとラオスにおけるプレアンコール期からアンコール期初期（2～9世紀）の都城遺跡の立地環境分析を行った。その成果は別途論説として地学雑誌に投稿中のため、ここでは概要報告のみを行う。

カンボジアを中心としたアンコール期（9～15世紀）の都城に関しては、歴史学・考古学を中心に古くから多くの研究がある。しかし、プレ

アンコール期の遺跡の立地環境や当時の生産システム等を考察する地理学的研究は、まだ非常にわずかである。このことより、本研究はインドシナ半島に版図を広げたアンコール文明を、その前身のフナン（中国史書の「扶南」；1～7世紀）やチェンラ（中国史書の「真臘」；6～8世紀）時代に遡り、土地と水と人間社会の関係の視点から考察しようとするものである。

本研究では、メコン川流域に展開したプレアンコール期からアンコール期初期にかけての都城

* 早稲田大学教育学部

** 東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程

* School of Education, Waseda University

** Graduate School of Frontier Sciences, The University of Tokyo

図 1 研究対象地域.

Fig. 1 Study area.

を，土地条件に注目してその基盤をさぐることをめざした。すなわち，当時の都城はインドから移入されたヒンドゥー教などの寺院を中心とした宗教都市ということが出来るが，これらの都市では，ヒンドゥー教の祭祀にも欠かせない水と建造物の組み合わせのためにどのような地形条件が選ばれたのか，人びとの生活を支える食糧生産としての稲作システムがどのように行われたのか等の問題を，地形や表層地質，水文環境をもとに議論することを目的とする。

II. 研究方法

ブレアンコール期からアンコール期初期にかけての都城は，これまでにカンボジアとその周辺に数ヶ所知られている。中国の文献資料のほか，遺跡の考古学的調査や碑文資料によりその情報が断片的に残されている。

本研究ではメコン川下流域に位置する 6 ヶ所の都城遺跡を対象とし（図 1），これらの遺跡を中心に，都城域の重要な構成要素である寺院の建造地や，都城を支える稲作のための水利システム

等の水文条件に着目し，空中写真判読と，現地における地形調査・表層地質調査等により微地形区分図を作成し，都城の立地環境を考察した。

遺跡の成立時期に関しては主に文献によったが，地形条件については空中写真（縮尺約 25000 分の 1）判読と現地調査によりそれぞれ微地形区分図を作成した。また，土地利用調査・表層地質調査（簡易ボーリングを含む）を実施し，堆積物のサンプリングも行った。

III. 対象地域の位置づけ

本研究ではメコン川下流域に位置するフナン期 1 ヶ所，チェンラ期 4 ヶ所，アンコール期初期 1 ヶ所の計 6 ヶ所の都城遺跡を対象とした。

フナンは紀元 1 世紀頃から現在のベトナムとカンボジアのメコンデルタ地域に展開した国で，本研究ではカンボジア南部タケオ州のアンコールボレイ遺跡を対象とした。

チェンラは 6 世紀から 7 世紀初めにかけて現在のラオス南部からメコン川沿いに南下し，各地に小国を形成した。7 世紀頃にほぼ現在のカンボ

図 2 アンコールボレイ南方の孤立丘（プノムダー）と寺院。

Fig. 2 A temple on the summit of a hill (Phnom Da), south of Angkor Borei.

ジア全土を支配したが8世紀初めに国は分裂した（石澤, 2005）。その初期の都城として、ラオス南部のワットプー寺院近傍の、シュレスタプラと呼ばれた都城を取りあげた。また、それ以降に成立したと考えられるカンボジア国内のサンボー・プレイ・クック遺跡（イシャナプラ都城に比定される；中部コンポントム州）と、バンテアイ・プレイ・ノコール遺跡（メコン川左岸コンボンチャム州）、プノムチソー遺跡（南部タケオ州）を対象とした。

その後9世紀初め頃に国土が再統一され、いわゆるアンコール王朝が始まったとされる。この時期の都城のうち、ハリハラーラヤと呼ばれた初期の都（カンボジア、シエムリアプ市東方ロリュオス遺跡）を対象とした。

対象地域はメコン川下流域に位置し、ラオスのワットプー寺院周辺では氾濫原は狭く、谷底平野状である。カンボジア国内に入ると、メコン川はコンボンチャム付近から広い氾濫原を持つようになる。また、トンレサップ湖は雨季になるとメコン川からの逆流により、その面積が3倍以上に拡大する。下流部はカンボジアの首都のプノンペン付近を境に、上流側のカンボジア平原と下流側のメコンデルタ地域におおよそ区分される（Kubo, 2008）。

図 3 ワットプー寺院と背後の聖山。

Fig. 3 Vat Phou temple and holy mountain in the back.

IV. 微地形区分図に基づく都城の立地条件の分析

第II章に示した方法で作成した微地形区分図に基づき、各都城の立地条件を分析した。詳しくは投稿中の別稿で報告するが、概要は以下の通りである。

1) アンコールボレイ遺跡

メコンデルタに半島状に突出する微高地（氾濫原面よりもわずかに高く通常浸水しないまとまった地域で、「低位面」とした）に位置し、北西-南東方向に延びる約1 km × 2 kmのいびつな方形の環濠跡が認められる。周辺の微高地上に溜池の跡が分布する。また、都城の南方には孤立丘上に寺院が立地する（図2）。

2) シュレスタプラ都城跡

山麓にあるワットプー寺院（図3）とメコン川の間、標高およそ90 mの台地上に位置している。空中写真で東西方向を長辺とする約2.5 km × 4 km程度の環濠跡が確認され、その内側にも濠がめぐらされている。東側はメコン川の河岸侵食により失われている。

3) サンボー・プレイ・クック遺跡（イシャナプラ都城跡）

メコン川支流セン川流域に位置し、遺跡群の位置する台地域と、セン川の沖積低地に二分される。台地上には一辺約2 kmで軸線がやや西へ傾く環濠により三方を囲まれる都城跡があり、東側は小開析谷をはさんで台地上に三つの寺院群が現

図 4 サンボー・プレイ・クック遺跡の祠堂。

Fig. 4 An octagonal temple of Sambor Prei Kuk Site.

存し(図4), さらに東側の低地には寺院群につながる参道状の土手や溜池跡などが分布する。

4) バンテアイ・プレイ・ノコール遺跡

メコン川から30 kmほど東方の標高15 m前後の平原に位置する。一辺約2.3 kmのほぼ正方形の環濠と土手によって囲まれ, 内部には中央のやや東寄りに寺院跡がある。

5) プノムチソー遺跡

アンコールボレイの北西約30 kmの平野にある標高約130 mの孤立丘上に寺院があり(図5), 東麓の平地には参道や拝殿状の建物, 水路状の痕跡, 多くの小さな溜池跡などが集中してみられるが, 環濠は認められない。

6) ハリハララヤ都城跡

シエムリアプ市東の標高20 m程の南へ緩やかに傾斜する扇状地上に位置し, インドラタターカと呼ばれるバライ(巨大な貯水池)跡の中央部に寺院があり, また南側にも寺院群があり, ロリュオス遺跡群と呼ばれる。

V. 都城の構造と立地条件

各都城の分析から, プレアンコール期からアンコール期初期にかけての都城の構造と立地と地形条件との関係を考察した。議論の詳細は別途投稿中の論文に示すが, 氾濫原上に都城が立地することではなく, 微高地状の低位面や台地, 扇状地などの地形条件を積極的に活用したことが明らかに

図 5 プノムチソー山上の寺院。

Fig. 5 A hilltop temple of Phnom Chissor.

なった。また, 寺院が都城に対しどのように配列されているのか, 食糧生産域を示す溜池や水田遺構などと都城との関係についても地形条件に着目して考察した。その結果, プレアンコール期からアンコール期初期にかけての都城の立地や構造の時代的変遷を明らかにした。

謝 辞

本報告は, 平成20年度東京地学協会研究助成を受け, 古城・久保(2003)や南雲(2007)の内容の一部に研究助成による調査結果を加えたものであり, 南雲ほか(2008)でその一部を報告した。また, 地学雑誌編集委員会, ならびに投稿論文の査読者より懇切なご指導をいただいたことに篤くお礼を申しあげます。

文 献

- 石澤良昭(2005): アンコール・王たちの物語 碑文・発掘成果から読み解く。日本放送出版協会, 274p.
- 古城 泰・久保純子(2003): カンボジア中部, ソンボープレイクック遺跡(7世紀)の調査—1998・1999年度調査より—。早稲田大学大学院教育学研究科紀要, **13**, 15-31.
- Kubo, S. (2008): Geomorphological features and sub-surface geology of the Lower Mekong Plain around Phnom Penh city, Cambodia (Southeast Asia). *Re-vista Geografica Academica*, **2**, (1), 20-32.
- 南雲直子(2007): カンボジア古代都市イーシャナプラとその立地に関する研究—地形学の観点から—。早稲田大学大学院教育学研究科修士論文。
- 南雲直子・須貝俊彦・久保純子(2008): カンボジア, プレアンコール期古代都市遺跡の都市構造に関する考察。日本地理学会発表要旨集, **74**, 147.